

【陽だまりの樹】

手塚治虫(講談社、小学館)

2021.6.30

大阪府東大阪市 望月隆昭 (87)

手塚治虫の曾祖父、手塚良庵(のちの良仙)を主人公の一人に幕末から明治へ、激動の時代を描いた長編漫画である。もう一人の主人公は下級武士、伊武谷(いぶ谷)万二郎。実話とフィクションを交えて二人の人生をたどる。

医師の家に生まれた良庵は適塾で緒方洪庵に学んだ蘭方医。同門の福沢諭吉らと勉学に励みつつ、女好きが玉にきずだが情に厚く、正義感の強い人物だ。父や洪庵らが進めてきた種痘所の仕事を助け、やがて全国に猛威をふるうコレラの治療や予防に関わってゆく。

一方の万二郎は世渡りに不器用だが一本気で腕が立ち、やがて老中に取り立てられ、政治や軍事、外交の現場を目の当たりにする。西郷隆盛や米国の外交官ハリスなど数多くの著名人が現れ、二人は歴史の舞台を駆け抜ける。

「陽だまりの樹」とは万二郎らが私淑した碩学、藤田東湖の庭にある樹齢三百年の桜の古木のことだ。今まさに枯れ果てんとする様に幕府終焉の姿を重ねた。

わが町のことも語りたい。90年前、私の父が医院を開業し、私が生まれた頃、地元の商店街は活気に満ち、一本の大きな梅檀(せんたん)の木があった。その下で商店街の主と言われたTさんが床几(しょうぎ)を出して座り、街の人々が語り、子供たちが遊び回った。

時は流れ、町も古い、人々も少なくなつた。父の後を継いで40年、ここで診療を続けた私も老人となり、医院を取り壊す日がやってきた。手塚さんは曾祖父に漫画でレクイエムを贈ったが、私の脳裏にも父の思い出が去来する。

色々な音が耳に残っている。梅檀の梢を渡る風の音や軒下の燕の声、母の声……。私は住み慣れた地を離れたが、わが町の陽だまりの樹は、記憶の中に生きている。

## ピブリオエッセー

### わが町の大木に思いを重ねて

